



うちのおやじとなるべくつきあうな

高田克子

うちの おやじは きちがいですから
なるべく つきあわないで ください。

うちの おやじは ねしょんべんを 20かいぐらいたれて

うんこを 十五かい ぐらい たれたこともあります。

それに きちがい みたいにどなりません。

おさけをのまなかったら ねこ みたいに しゃべりません。

だから つきあってたて おもしろくないよ。

それに あほみたいです。だから だれでもいいですから

せいしんびょういんに にゅういんさせてやってください。

みなさん こんにちははなしは だれでも おもしろくないと

おもいます。

このし(詩)を 見てくださいますして どうも

ありがとうございます。

本名 高田克子 徳島県出身 十才
徳島県出身で現在今宮小学校の四年生。裸の詩壇では一番若く、
一番するどい詩を発表しているが、最近はどうしたのかあまり作品
を書かなくなったのは寂しい。
私の飲み仲間であった故高田君の良き護衛兵としてのカツちゃん
は、釜ヶ崎の本当の姿をその幼い心にはつきりと焼きつけているの
ではなからうか。その意味から彼女の作品には、おとなの気持から
の助言を避けて、すくすくと伸ばして行きたいように思えるのであ
るが……。

(田結記)



か

高田康生

ああ えらいことした

おかあちゃんのあたま ふんでしもた

ああまた タンスも ふんでしもた

おかあちゃんが

—あほ ちびすけがタンスなんか ふめるかいな

といいよった

けどやっちゃん

ほんまにふんでるやんか

かげを—

本名 高田康生 七歳 大阪市出身 小学生
 裸の会の最年少会員。
 姉のかっちゃんが神経質なのに較べて、このやすお君は大へんオットリしたタイプ。色まことに白く、貴族的な顔立ちは、これが下町の子とは見えない。
 きちよう面な子供で、毎日登校する時刻が決まっているという。お母さんに時刻をきいて、それが、毎日の登校時刻に一分前であっても出かけない。一分過ぎて自分の定刻がくると腰を上げるそうである。
 年令的にまだ自分のものを掴むのは無理だが、どうか、のびのびと育っていい人間になって下さい。
 (広野記)



す
ず
め

二葉 由美子

跡取り息子が生まれた家に

もらい娘がおりました

いつそのことと

夜の夜中にオトウとオツカアが そうだん衆議一決

「子守はどうじや」

赤いゾウリが目にしみて

朝のゆふんで

半べソかいて詩をうたいます

コンマイ コンマイ

おたいの背

おとつあんがおさえるけん

おかみさんがおさえるけん

美代ちやんがぶらさがるけん

コンマイ コンマイ

ドングレリコのおたいの背

そこで親なしすずめが

チユン チユン

今じや 釜ヶ崎で チユン チユン

となり村に行きました

オバケのような大けな家

中はまつ暗 カビ臭い

それから

数日たちました

子供がギヤア ギヤア泣きまして

そこでお文さん

やけのやんばち

本名 二葉文字 三十四才 独身
行商をして生活を支えている。

詩的イメージの豊富さと、天性的な鋭い感覚をもつて、勝れた詩や絵画を次々と生み出す。自费出版したものに「詩と版画」があり、去る九月下旬、大阪市立美術館で開催された創造展に、油絵を初出品して初入選している。釜ヶ崎で発見した素晴らしい詩人、又は芸術家として、裸の会の誇りとする一人である。現在も生活に追われていくようだが、彼女の詩神、及び芸術性を深め、高めるためにも、もつともつと苦しんでもらいたいと思います。小柄でピリツとしたところがあがるが、前進してもらおうために、足が大地から離れないように、絶えず自省してもらいたいと思います。(松原記)



い き る

なかのぼる

青空があつて みんなしたしい

だから 私は生きなければならぬ

——朝

ひくい屋根がかさなり合つて そこからイメージが

育つ

貪しい色彩の 紅でした

「今日は 赤ちゃんー」私はこのリズムが嫌だ

眼を伏せても 古い記憶は甦らない

ガムシヤラに働いて いのちすりへらす

或る夜

妻といとほしみ

路地がつづいて ベニヤを張り合わせた団楽がある

スラムという 夜の縮図

本名 中 昇 五十一才 靴修理業 三重県出身

霸王樹の同人印田巨鳥に師事、自由律短歌を標榜。最近の彼の短歌には、地底から吹き出すフレツシユな

ものを感じさせる。この人の人となりを単的に表現するならば、放浪の歌人といつたところだ。

厳しく人生を見つめて生きて来た人であるだけに、人間につきまとう悲哀というものに、限らない愛着を

抱いている人であり、釜ヶ崎のどまん中に住み、真に釜ヶ崎を愛する人間の一人でもある。毎朝子犬を連れて

釜ヶ崎かいわいを散歩するのがこの人の日課である。柔和な顔に漂う豊かな人間性は、絶えず人生とい

うものを厳しく見つめ、真剣に自が道を極めんとする日々の努力によつて、つちかわれたものと思ひます。

嗜みしめる程味の出ってくる人間である。

裸の会の歌壇を背負つて立つ人であるだけに、裸の会にとつては貴重な存在である。

(松原記)



裸はともしび

相良武雄

くらやみの中を手さぐりで歩む時

前方にあかりさえあれば

たとえ

その光が弱くても

目標となつて呉れる

〃裸〃は前方にあるあかり

〃裸〃は心のともしび

くらやみの中に只一人

おいてきぼりをくつた時

豆電球のあかりでもあれば

たとえ

それが僅かなすき間から漏れてくる光でも

心に大きな安らぎを与えて呉れる

〃裸〃はすき間から漏れてくる光

〃裸〃は心のともしび

何となく淋しくなった時

〃裸〃のページをめくれば

どのページからも、どのページからも

〃裸〃の友達がほほえみかけてくれる

私は一人ぼっちではない

〃裸〃は心のともしび

〃裸〃は釜ヶ崎を明るく照らすともしび

本名 半田鶴彦 兵庫県出身 四十六才
北九州は福岡の中学を出て交易営団に務めたが勿論戦時中なので北満の夕陽に涙を流した兵隊さんの一人である。終戦後は閉鎖機関整理委員会に二十六年まで勤務したというから、この人も釜リアリズムの代表的な歴史を持っていて、あの戦争を確実に把握している人間であるといえる。

裸の会には初期に入会しているが作品は最近まで発表しなかった。T荘で素晴らしいサウンドイッチを御馳走になった記憶があるが、つまり或る意味での器用なところか、なんでもやれる人間のような気がする。

現在は経済誌を発行し企業、行政への苦情相談室を設立して活躍中、これから期待される成長待望株か？
(田結記)



真

実

砧

三

郎

葉かげに 手をさし入れて

わが振(も)ぐ いちじくのつめたさ

しんじつ つめたき いちじくなれば

ま白なる 乳も たれてありけり

— 詩集「樹液」より —

本名 林 正武 六十一歳 大阪府出身
 慶大文学部卒業、旺文社指導部員、中学教師、のち
 満州国政府官吏、終戦後帰国、郷里の塚において「ユ
 ーカリ産業社」を創立。一方「人と法の新聞」を主宰、
 法の啓蒙運動に従事す。
 大学同期には、藤浦洗、山本健吉、丸岡明、芦原英
 了等がいる。著書としては、詩集「樹液」の他に、歌
 集「赤茄子の花」がある。
 詩歴は長く、西脇順三郎氏に師事し、草野心平、尾
 形亀之助らと「文学祭」を出していた頃が、一番華や
 かな時代であったといえよう。
 現在釜ヶ崎においてアパート管理のかたわら、大阪
 中華学校講師をつとめている。
 アパートの住人たちの相談相手となって、骨身惜し
 まずよく面倒をみてやっている。この人も庶民を愛
 し、釜ヶ崎を愛する詩人のひとりといえるでしょう。

(松原記)



貧しい村にある煙突

柳原一郎

煙むは天に向かうから

雨は天がふらすから

けむが噴きでているからは

雨は雨とて吹きこむ筈で

煙突の中ではどうして燃えるんか

とんどは雨で燻るんぞ

雨はどんどん はげしうなる

けむはだんだん 逼うようになる

どんどん だんだん夜が濃うなるで

どんどん だんだん朝が近うなるで

ありようは人間の白骨になる時間

を問わないまでも

坊んよ

坊んがいうように

だんだんはげしい雨の吹きぶり

不思議にけむのつづく煙突で

ひとりふたりと出ていける巾広で

そうよな

赤い煉瓦を積みあげたまでがお伽で

ぢいさんが坊んの頃から立ちどおし

あめかぜ物の怪にんげんどもが

恨みつらみのしるでしみだらけ

本名 柳原一郎 45才 東京都出身 クリーニング業

関西にもう三十年近くも住み、七年ほど前から東萩町でクリーニング屋さんをしているが、江戸ッ子で四ッ谷は須賀町の出身である。

私が少年時代、文学というものをかじりはじめたころの友達ともつきあいがあるということで、六年前から「表現」という詩誌を発行しているが、いまは休刊中とのこと。

裸が発足して間もなく松原氏を訪ねて来、一緒に詩の話などをして入会したのだが、「少年のころから詩と新短歌を書いてきました。これからも忘じ難くいることであります」と語っているように、今後とも良い作品を書き続けてくれることを期待しています。

現在新短歌連盟会員 (田結記)



この苦しみ

角 光 夫

俺の体は燃えるようにあつい

汗が出てくる

拭いても拭いても

頭がガンガンする

苦しさのため気が遠くなる

誰か救つてくれ!

何かにすがりたい!

俺は壁にかけた

ヘレンケラーの写真をにらんだ

歯をくいしばり

こぶしを握りしめたまま

この苦しみに負けられない

くそ! 負けないぞ

俺はきつと勝つて見せる

名もない私たちが 社会の土台になつて

すべてのものを作り出しているという

自信と誇りをもとう

本名 同じ 大分県出身 四十九才
裸の会には創立直後に入会した最古参者のひとり。作品はあまり書いていないが、遠い現場からでも懇談会には駆けつけてくる。つまり会を愛している男だといえる。いや、会だけではなく仕事も、家庭も愛している点からみて、本当に真面目な人間だといえよう。学校を出てから九州配電に電気工として就職、昭和三十年に大阪し、釜ヶ崎に住みつき、奥さんと娘の三人で明るい家庭をつくつてゐる。左官仕事で近県各地に泊りがけで出張するが、便りとみやげを忘れない。アンコ仲間や部下にも信頼されて、良い意味でのボス的存在である。
(田結記)



土 人 形

城 山 佐 千 雄

土で作られた私なのに
人間と同じ機能の働きを
もっているというのです
軀も動くというのです
大昔に――

誰に作られたか解らない土人形の私が
今まで一度も
手足を伸ばしたことはないというのに
いつも同じ表情で 同じ裸で
ころがさされているのです
一度思いきり動いてみたいと思います

ほらほらみなさん
やはりひびが入って

割れ自が大きくなってきたでしょう
今に粉々になるのです
機能の働きなんて初めから
信じていませんでした
土人形なんですからね それも
色のわるい素焼きなんですよ

本名 城山唯夫 42歳 大阪市出身 ブロック工
少年時代を広島県呉市で過ごし、旧制中学卒業後母の郷里において理容見習生となる。
この頃から俳句を始める。軍歴もあるが、軍艦に二三次乗っただけで終戦を迎えたとのこ
とである。

昭和二十八年頃、兵庫県三田市において理容店を開くと同時に、俳句雑誌「極星」を主
宰して後輩の指導にあたっていたが、商売に失敗したことから妻子を残して、ぶらりと生
れ故郷である大阪へやって来たのが八年前のこと「ほんやりと暮らしていたら、安易な生
活がやみつきになって、釜ヶ崎に根をおろしかねない」といって寂しそうな表情をする。
俳句については相当のキャリアをもっているだけに、指導者格の一人といえよう。最近
詩を書き始めたという彼であるが、この人の詩には、柔かくて温かい彼なりの人間性がほ
のかに漂っている。

「仕事をしながら、今日は詩の研究会やなあ、あすは俳句の会やなあ、と思うと楽しく
てね、ほんとに裸の会に入っただことを喜んでいきますのや」と実感を述べるこの人も、裸の
会を心の寄り処として、厳しく自己を見つめながら生きている会員のひとりである。

(松原記)



貧乏神

高田トキエ

みなさん すみません

私はなにも知りません

貧乏神と仲良しになってしまい

いくら働いても何も残りません

その日暮らしです

四年ぼうずの長女と

一年淑女の長男と

ふたりはけんかをしながら

仲良く遊んでいるんです

私はそれを見ながら釜ヶ崎で

商売に励んでいます

私はなにもわかりません

みなさん どうぞよろしく

初商売頭があがるひまがない

本名 高田トキエ 三十六歳 大阪市出身 露店商

高等小学校を卒業してから女中奉公などしていたが、昭和二十七年、高田実氏と結婚した。高田一家が釜ヶ崎に住みつくことになった経緯については詳にしないが、これは三十四年のことである。夫君はバタヤをやり始め、彼女も一緒になって車をひく夫君を援けていた姿もしばしば見ることがあった。思うに、夫君が大酒飲みで、商売途中にグロッキーになることなど再々あって、夫君にばかり委せておけないということでもあったろうか。少しも恥ずかしそうな様子のなかったことに感心した記憶がいまでも残っている。

夫君は大酒飲みではあったが詩人肌の人で、三十七年六月、夫婦とも裸の会に入会している。それから彼女も短歌や詩を習い始めた。

彼女は会員中でも美人群の一人に属する。シンもすっかりして、思ったことはハッキリいう。しかし、男運が悪いというのか、酒を飲むとダラシのなかった夫君は一昨年急逝し、現在の夫君もまた、酒を飲むと脱線するタイプだ。

「夫の操縦法が下手なのではないか」と評する人もあるが、これは酷かもしれない。なにせよ、高田氏の忘れ形見、かっちゃんやオオ坊を、これから、いかに心身ともに健やかに育てていくかが、この人に課せられた最大の問題であり、この人の真価を決定するものであると思う。

(広野記)



め
だ
し

角
田
君
子

おとうちゃんと結婚してから

二十六年になります

一日も休んだことがありません

働いても 働いても

ちっとも芽が出ません

毎朝三時に起きおとうちゃんと二人で

南海のガード下へ行き

天ぶらを揚げて売るのですが

北風に吹きさらされると身が凍えそうです

水銀灯を眺めてはひとり

心を慰めているのです

釜ヶ崎に住みついてから十五年になります

ちっとはめが出て欲しいものだと思います

本名 角田君子 五十五才 高知県出身 露店商

前述の角田菊治さんの愛妻である。毎朝三時ごろに起きて、御主人と一緒に釜ヶ崎の労働者の早朝のカロリ―源となる天ぶらの準備をするのだから、この人もしんの強い良妻賢母である。

高等小学校を卒業後結婚するまではバスの車掌、店員をしていたので、人に接する態度は非常に柔かい。小生が前後不覚につぶれてしまったとき、手を引っぱって貰って我が家によくたどりついた記憶は、いまも生々しく心の底に焼きつけられているが、店にくる総ての人を、まるで自分の子供か弟か、または気むすかしさが良くわかっておじいさんのようにやさしくいたわるのを見ていると釜ヶ崎のお母さんだと思ふのだ。

裸の初期には随筆などを書いていたが、その後立ちのき、御主人の入院、忙がしきなどで作品が見られないが、この人なら本当に釜ヶ崎らしい小品ができるのではないであろうか？ (田結記)



ささやかな夕げ

高田 佳 青

先妻の仏前にごはんを供えたら

△おとうちゃん南無妙法蓮華経と言えよ▽

と下の子供がいう

△おとうちゃん南無阿弥陀仏と言えよ▽

と上の子供がいう

家族の眼が光っている

私は先妻の名をいうて

△一緒に食べよう▽というた

霞町のバタ屋さん

本名 高田 実 昭和三十九年十一月二十五日没 享年四十五歳 徳島県出身
人は彼を大酒飲みといい、飲んだくれと呼び、そして本当に精神病院にまで行ってきたのだが、私には彼がとことん酒を浴び続けた気持が理解できるような気がする。
人間という生きものは、永久に過去の影を引きずっているのだが、彼の場合には影にのしかかられていた。平和な家庭から戦場に引っぱりだされ、そして総てを失った。情熱家であり、ロマンティストであり、論客でもある彼は、失ったものを更に振り切るために酒を飲むのだが、それはいつも逆効果になる、釜ヶ崎でへべれけに酔っている人達の多くは、それなのではなからうか？
カザリ職としては素晴らしい腕をもっている彼が、この町でバタ屋をやっていた心情、その心の中の影が、ついに彼を不帰の客としてしまった、と私は思っている。
こと俳句に関しては強い信念を持ち、よく一緒に飲む度に俳論を聞かされたのが、今では懐しい思い出になってしまった。
(田結記)



裸 劇 場

多 田 芳 乃

やるといつたら裸でやるさ

それが人生のえらぶ道

家は明かるく光をさして

妻や子供はえびす顔

こんな浮世にみれんはないが

おれも男だやるだけやるさ

無限の努力を裸で過ごし

地下足袋はいても働かん

時よこの世は裸で渡る

もちつもたれつ温情こめて

柳は風と仲よく動く

これが平和の国造り

本名 多田芳乃 昭和三十八年三月十六日没 享年六十四歳 広島県出身
生前は、釜ヶ崎のどまん中に在った大きな借家に一人で住み、間貸しをして細々と暮らしていた人である。裸の会結成後間もなく賛助会員として入会し、次々と賛助会員を募ってくれた方である。詩吟が好きで、私はこの人の家を訪問するたびに、詩吟を吟じて聞かしてくれ、私も吟じさせられたものである。
裸誌にもたびたび短歌や俳句を投稿している。この人も孤独な人であつただけに、裸の会を愛し、裸の会を心のよりどころとして生きて来た人であつた。
裸の会の定例懇談会には、いつも出席していた。懇談会の前日に脳溢血で倒れ、ひとり淋しく他界した。会員達が奔走して広島から親戚の方を呼び寄せ、立派な葬儀をすることが出来たのである。それ程会員達から親しまれていただけに、この人の死が惜しまれてならない。眼を閉じて耳をすますと、今でも、詩吟を吟ずる男性的な多田さんの声が聞こえてくるようである。
(松原記)



初

恋

子

雲

ほしかげ蒼き夜

わが燃ゆる胸で すすり泣きし君

水色の思い出

君と結びし うま夢の

やさしき瞳は 涙にとざされ

長いまつげは

うつむきて

緑の黒髪は うちふるえ

われ慰めるすべをも知らず

ただ青い灯を見つめるのみ

こおろぎの音も枯れて

コスモス一輪 ほろりと落ちる

本名 山本政美 四十歳 福岡県博多出身

裸の会の過去三回に亘る文化祭には、名司会振りを見せ、本職と間違えられることしばしば、ヘタな本職よりはイヤ味がなくて確かにうまい。器用さだけではこなし切れない、この味は彼の履歴を早れば判る。

予科練の経験ある猛者。しかも一飛曹。

彼にも戦争による痛恨は深い。両親は戦災で他界、二十七年には愛妻と長女をも失くしている。次女を弟に託し上京したとき、演劇関係の文芸部員として働く。これは貴重な経験であつたろうと思う。逆境にもくじけぬ太さと共に大らかさを持ち得たのは、この時代の生活が大きな作用をしているのではないか。しかし、昼夜の別ないこの世界の厳しさは彼の胸を冒した。

入院生活二年。再度上京したが、半年を出ずして病氣再発血を吐いた。再入院三年。現在は幸い、健康状態を取戻したという。

心身ともにその苦悩と闘い抜いた好男児。さらに発展されんことを――。

(広野記)



影

柏原和男

ダム工事のずい道の奥に

錆色のスクラップの底に

或はミキサのコンクリーの中に

俺の青春もろともに埋没した

たったひとつの影よ

お前ははずこへとび立ったのか

たまにビルを創る足場の板で

荷役に疲れた水平線で

或は居酒屋の片隅で

鳥影のようにかすめる

お前の姿を見るのだが――

本名 柏原和男 昭和三十八年二月二十三日没 享年三十二歳 宮崎県出身
「西成区山王町なんとか荘では、まともな会社には就職できませんねえ」――私は
あの悲しい日の十日ほど前に彼がいつた言葉が、いまだに忘れられない。ようやく勤
めだした会社が経営不振で駄目になり、その頃の彼には或るあせりがあったようだ。
毎晩のように裸の会の事務所に來て政治を論じ、社会を語る詩人柏原和男は、真剣に
釜ヶ崎を考え、ここに住むという理由だけで白眼視する人に対し、履歴書をポケット
にねじこんで体当りをしてきたが、どうしてもその壁が破れなかったのだ。
裸誌第十六号から四回にわたって掲載した座談会「私達の住む釜ヶ崎」は彼の企画
になるもので、その点から考えてみても、彼が私達の住む町に抱いていた気持がよく
理解できる。
裸の会がここまで大きくなってきた現在、誌上に柏原君の作品が見られないのは彼
の詩が素晴らしいものであっただけに残念なことだ。その遺稿は十四号に掲載してあ
る。
(田結記)



五十 浅 玉

大野 勝太郎

またきょうも雨やなあー
嫌になるなあー

「おっさんはいつまで寝てるね、俺今めし食うて来たぜ。おっさんがいつもいうてる白味噌のお汁と、茄子の浅漬や、おいしかった。おっさんもええかげんに起きて食べといで、残りの銭(ぜに)これや」

五十銭玉ひとつぼんと頭元へ持って来て、

「早よ起き、俺は腹一杯や、おっさん早よ食べといで」

私は彼氏のいう食堂へ行った。味噌汁と漬物とめしを注文した。持って来た汁は赤味噌、漬物は胡瓜。

「君ノ白味噌汁と違うのか？茄子(なすび)の浅漬ないんか？」

「へえ、きょうはなすびおまへんね」

話が違う。しかし注文したので食べた。どうも気になる。すると彼は、この食堂へ来ておらん。食べておらん。私に食べさせるために、私の好きな物を言い立てて、私を寝

床から引き起こしたのだ。嬉しかった。

次の日も雨だった。彼氏の寝姿を見ながら、私は早く起きて仕事を探した。あった。百円札を八枚持って帰った。

「君どうやった」

「あぶれた」

「遅かったんやなあ」

「明日こそ行くぜ」

「ああそうか、明日は一緒に行こう、明日のため一杯飲んで、めしでも食うか、この前は済まなんだなあー」

本名 大野勝太郎 昭和三十八年十月十四日没 享年五十七歳 大阪市出身

腰かけの飲み屋でちよくちよく会うことがあった。そんなとき、目礼は交わすのだが、特に話があったという記憶はない。飲む席で、あまり心安くない人とはおしやべりしたくないし、大野さんもそんな酒ではなかつたろうか。

飲む姿勢は崩していないのに、大分回っているようだ、と思ったことが再々ある。また、とてもヘレケの大野さんを三角公円で見たこともある。傍を通るとき、こちらは挨拶のつもりで、こころもち頭を下げたのに、向うは気付かなかった。

そういえば、たいがい飲み助の私が、大野さんと出会ったとき、いつも彼の方がよけい酔っていた。あれでは、いまに体を壊すんではないか、という気はしたものの、一応思慮分別のありそうな年長の彼に、つきあいの浅い私がいえるものではなかった。やはり心にいい知れぬ孤独の悩み、苦しみ、のある釜ヶ崎独得の酒であつたらうか。

人に迷惑かけず、ひっそりと生きた、いい人でしたよ。

(広野記)



川柳

曾我米吉

なべ料理ふぐもなおよしアンコまた

本名 曾我米吉 昭和四十年九月十四日没 享年五十八歳 高知県出身
会員としては半年ぐらゐの新しい人だったが、この人ほど会員であることを喜び、誇り
とした人も少ないのではなからうか。
十五日の定例懇談会には嬉々として出席した。もともと酒好きで、感激家だったから、
微クンをおびて、出席する毎にその喜びを洩らすのが常だった。ある月の懇談会に、いく
らか酒が過ぎていたのだらう。順次に自己紹介をしている最中に、突然、隅の方から歌い
出したのだ。隣り合わせた私と平井君が相談して、平井君がソツと外へ連れ出してくれた
のだが――。間もなくビワ湖へのレクリエーションが催されたのだが、あれほど酒好きの
曾我が一滴も飲まずにみんなの世話を焼いてくれた。それは可なり辛いことであつたらう
し、克己心の要ることであつたと思う。これは前の懇談会で迷惑をかけたつぐないをしな
ければという強い意志の働きであつたに違いない。このことは会長も非常に印象が深か
つたという。
レクリエーション特集号に自分のことが出ているといつて無邪気に喜んでゐた曾我。そ
の裸誌を友達に見せびらかしてゐた曾我。
彼の死を、彼が毎日のように飲みにいゝた安定所前の沖繩の店で告げたとき、この店の
ママさんである「シーちゃん」は、ものもいわず、ポロポロと涙を落した。
つきあつたことごとくの人に愛され、その死を悼まれる彼こそ、釜ヶ崎のまことの詩人
ではなかつたか――。
(広野記)